

マンゲース移入に関する沖縄の新聞記事

当山 昌直・小倉 剛

はじめに

沖縄島のハイイロマンゲース *Herpestes edwardsii* (以下マンゲースと称する) は、ネズミ類やハブの駆除の目的で1910年に渡瀬庄三郎によってインドから移入されたものである。しかし、移入後は当初の目的の対象動物のみならず、在来の他の動物をも捕食していると見られ、沖縄島固有の動物相に深刻な影響を及ぼすことが心配されている(池原ら, 1984; など)。このような中で、本種の沖縄島における分布や生態について調査がすすめられつつある(藤枝, 1980; 池原, 1991; 川島ら, 1996; 沖縄総合事務局北部ダム事務所編, 1995a, b, 1997, 1998)。

今後、沖縄島における在来動物の保護や農作物への被害防除観点からも、本種に関する資料の収集と整理は急務になるものと考えられる。そこで、今回は本種が沖縄島に移入された1910年ごろの地元沖縄県内で発行された県の中央紙(沖縄毎日新聞・琉球新報が現存)からマンゲース関係の記事を抜き出し、移入当時の様相を明らかにすることとした。なお、本稿は資料的性質をもつもので、科学的な分析を加えるには至っていない。また、資料収集の期間も短期であったため十分なものとはいえないが、本種の沖縄島への移入についての何らかの資料として活用されれば幸いである。

沖縄島に移入されたマンゲースの学名については、これまで十分な分類学的分析が行なわれないうまま、ハイイロマンゲース *Herpestes edwardsii*、ジャワマンゲース *Herpestes javanicus* あるいはインドトビイロマンゲース *Herpestes fuscus* とする諸説が混在している。分類学的な検討については、

現在分析を進めており（小倉、未発表）、今後次第に明らかになって行くものと思われる。したがって、ここでは暫定的に従来一般的に用いられているハイイロマンゲース（インドマンゲース）*Herpestes edwardsii* の学名を用いておく。

方法

沖縄県公文書館史料編集室に所蔵されている戦前の新聞（沖縄毎日新聞・琉球新報）の紙焼き版（B4版）を使用して、1909年3月から1910年6月までの1年4ヶ月間の記事の中から「マンゲース」あるいは「渡瀬」の語句をキーワードにして関係する記事を抜き出した。記事の記述は発行年月日、新聞紙名、見出しの印（●や◎）、見出し：本文の順に記した。判読できない部分は直接マイクロフィルム等から読みとり、それでも判明できない部分は□で示した。記事中の誤字脱字と思われる部分は、直す必要がある場合を除き、できるだけ直さずにそのままにした。漢数字の一部は読みやすいように算用数字に変換した。人名以外の旧漢字は読みやすいように新漢字に直した。新聞記事の内容で資料が不足している部分については文献等で補足した。また、新聞記事や引用等の部分で、筆者らが加筆した部分は〔 〕内に示し、記事と区別できるようにした。なお、新聞に掲載されている渡瀬庄三郎の講演については、内容がマンゲース移入のことに直接関係していない場合はその講演内容の部分を省略した。

移入前の動向（1909年3月17日～4月13日の記事）

1909年（明治42）3月17日 沖縄毎日新聞

◎渡瀬教授の来沖／15日5時発：東京大学教授渡瀬庄三郎学術取調べの為鹿兒島沖縄に出張

1909年（明治42）4月7日 沖縄毎日新聞

◎黒岩国頭農学校長の出覇：国頭農学校長黒岩恒氏は一昨々日の運輸丸便にて出覇目下池田旅館に止泊

1909年(明治42)4月7日 琉球新報

◎沖縄教育講話会：明8日午後4時より那覇尋常高等小学校内に於て沖縄教育会の講話会を開き目下在羈中の渡瀬理学博士の講話ある由傍聴は随意なりと

◎黒岩校長の出羈：国頭農学校長黒岩恒氏一昨日の便船にて出羈せり池畑に投宿四五日間滞在の筈

1909年(明治42)4月8日 沖縄毎日新聞

◎渡瀬博士の来県について：渡瀬博士の来県に就ては世間にては蜚研究の為と言觸らす向きもあれど勿論博士は蜚研究学者の泰斗と仰がれ世界至る所に於て研究をなしたる人なれど今回来県の目的は只管飯匙蛇研究にある由にて其の退治方法は印度のコブラント(ハブ)即ち本県のハブよりも害毒の劇甚なるもの及びマングースと称する鼯に似た性質の極敏捷なる獸なるが□はハブ及び野鼠を撲滅するに至極重宝なるものにて熱帯地方當りにては右の方法を以てハブ類を退治しおる由なれば本県に於ても此の方法を模倣し野鼠杯を退治せんとの目論見にて目下調査中のよしなるが調査の結果に依りては初前記の動物を県下離島に於て試み漸次本島に及ぼす考案なりとなり

1909年(明治42)4月8日 琉球新報

◎教育会の講話会：昨紙既報の通り本日午後4時より那覇尋常高等小学校に於て沖縄教育会の講話会を開催し渡瀬博士の講話ある由なり傍聴希望者は随意聴講を許さるべしと云ふ

1909年(明治42)4月9日 琉球新報

◎渡瀬博士の講話(文責記者に在り)：<省略>

1909年(明治42)4月10日 琉球新報

◎渡瀬博士の講話(続)(文責記者に在り)：<省略>

◎渡瀬博士尚家訪問：目下滞県中の渡瀬理学博士は昨日午前岸本学務課長黒岩農学校長と共に尚家を訪問したり

1909年(明治42)4月13日 琉球新報

◎渡瀬博士の離島行：目下滞羈中の渡瀬理学博士は土地観察の爲属大山武輔氏と同行渡名喜島へ出発せり

当時沖縄県人及び当局は鼠害と蛇毒からの対策に天敵利用を考えていた(岸田, 1927)。1907年(明治40)米国ボストンで開催された第7回動物学

大会に委員として参加した渡瀬庄三郎博士がインドから参加した委員にマンゲースの輸入の可否を相談し、帰りにセイロンに立ち寄りマンゲースがコブラを捕らえる実況を見たことが移入の契機になったことを岸田（1927）は記している（これらの内容は、昭和2年1月24日発行の「沖縄日乃出新聞」からの引用で記されている）。

岸田（1927）によると、1909年の渡瀬の沖縄行きは、沖縄県における毒蛇の被害状況、その他産業一般の事情、気候、風土等、マンゲースの生息環境として注意を要する諸種の実地踏査のためとしている。3月21日に東京発、同30日沖縄県に出張滞在、20日〔間〕県視学泰蔵吉氏の案内により那覇、首里、糸満、西原、宜野湾を視察し、4月12日県属大山武輔島尻郡書記松方太次郎の案内で渡名喜島を調査、同28日に東京に帰任というスケジュールが岸田（1927）より読みとれる。また、岸田（1931）も渡瀬が来県したのは3月30日としている。

渡瀬の来沖と沖縄からの出発について、当時の新聞広告（沖縄毎日新聞と琉球新報：1909年（明治42）3月～4月）から船の入港出港を調べてみた。来沖について3月30日前後を調べたところ、30日に入港、または入港予定の本土便の船は見あたらなかった。4月28日に沖縄から出港した便は、沖縄毎日には大島、鹿児島、神戸、大阪行きとして馬上丸と金澤丸が記され、琉球新報には同日に大島、鹿児島、神戸、大阪行きとして金澤丸のみが記されている。来沖の日付については、さらに詳しく調べる必要がある。

沖縄島へのマンゲース移入前の関係者の動向については、移入一年前の渡瀬の来沖から具体的に始まる。渡瀬の来沖にあわせて、沖縄における当時の生物学者として著名な国頭農学校長の黒岩は、那覇へ赴き渡瀬と行動を一部共にしている。渡瀬の来沖の目的は4月8日の記事からも、マンゲース移入の予備調査であったことが伺える。

インドからの移送（1910年1月19日～1月22日の記事）

1910年（明治43）1月19日 沖縄毎日新聞

●渡瀬博士と沖縄

昨年来沖したる農科大学教授農学博士渡瀬庄三郎氏は客月22日横浜出帆の丹後丸に便乗し英領印度へ渡航したる由なるが其の用向はマンガース（イタチの類）即ち野鼠駆除及び飯匙蛇退治に無類の效能ある該獣を携帯し来る3月頃帰朝の筈なるが帰朝の上は野鼠、飯匙蛇の被害多き本県下に於て実地研鑽に従事さるるよしなり

1910年（明治43）1月19日 琉球新報

◎マンガースの移入／野鼠及ハブを駆除す：東京帝国理科大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏はマンガース移入の爲め先月22日横浜出帆の丹後丸にて英領印度へ赴きたるが同獣は野鼠を駆除するものなれば今回之を日本に移入して野鼠の駆除を行はんとするものなるが又一面には飯匙蛇を駆除し得るに付き其試験を本県に於て行ふの計画なりとて此程同博士より三四月頃同獣を齎して帰朝し第一着に本県に持ち来りて其試験を爲すべしとの旨日比知事へ来□ありたり

1910年（明治43）1月20日 沖縄毎日新聞

●「飯匙蛇」と「マンガース」：昨19日の紙上にも既に報道せる如く理科大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏は本県特産の「ハブ」及び野鼠駆除の目的にて其害敵たる印度産「マンガース」なる動物を輸入すべく昨年12月22日横浜解纜の丹後丸にて英領印度に渡航されたる由なるが本年三月頃帰朝の上此動物の試育を本県に委託さるゝに至るべしといふ毒蛇の爲めに疲まされたる地方の爲めに大に拓殖の功を見るに至らんか左に此動物に就きて聞き得たる所を記し大方の参考に供せん 「マンガース」とは学名「ハーベステス、マンゴー」の印度語名様なり麝香猫（狐、鼬、鼠の中間大の動物にして麝香を有せず）に類する食用小動物なり埃及地方に於て能く鰐魚及鶏卵を盗食する鼠猫亦此属也マンガースとは凡て此等の動物の属名として用ひらる真のマンガースは凡ての此動物と同じく隠縮爪及び麝香を有せざるも全然食肉動物也 体長尾を除き約一尺四寸四分余色は灰褐色又は鼠色なり性猛烈なるも容易に飼馴し得べく殊に毒蛇を嗜食す（蛇毒を感じず）るの故を以て大に愛育せらる亦克く鼠を駆食するか故に重宝此上なし1872年比目的を以て西印度に輸入を試みたり此等の著しき物性は単に此動物が毒蛇を咬嚼を防御するに足る敏捷軽快なる動作と又毒蛇を闘争中常に逆立せる長剛なる密毛及厚き体皮に帰固するなるべし

1910年（明治43）1月22日 琉球新報

◎「飯匙蛇」とマンガース／（農事試験場通知）：理学大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏は本県物産の飯蛇及び野鼠駆除の目的にて其害敵たる印度産（マンガース）なる動物を輸入すべく昨年12月22日横浜解纜の丹後丸にて英領

印度に渡航されたる由なるが本年三月頃帰朝の上此動物の試育を本県に委託さるゝに至るべしといふ毒蛇の爲めに□まされたる地方の爲めに大に拓殖の効を見るに至らむか此動物に就□て左に聞き得たる所を記せる大方の参考にせん「マンゲース」は学名「ハーベステス、マンゴー」の印度語名称なり麝香猫狐鼯鼠の中間大の小動物にして麝香□産する肉食獣なり埃及地方に於て克く鰐魚及鶏卵を盗食する鼯猫亦此属也「マンゲース」とは凡て此等の動物の属名として用ひらる真のマンゲースは凡ての此種動物と同じく隠縮爪及び麝香腺を有せざるも全然食肉動物なり体長尾を除き約一尺四寸四分余色は灰褐色又は鼯色なり性猛烈なるも容易□得らるべし殊に毒蛇を嗜食す（蛇毒を感ぜず）るの故を以て大に愛育せらる又克ち鼠を駆食するが故に重宝此上なし 1872年此目的を以て印度に輸入を試みたり此等の著しき特性は単に此動物が毒蛇を咬噬を防御するに足る敏捷軽快なる動作と又毒蛇を争闘する時に常に逆立せる長剛なる密毛及厚き体皮に帰因するなるべし

沖縄での予備調査を終えた8ヶ月後に、渡瀬は自らマンゲース移入のためインドに赴いた。1909年（明治42）12月24日東京発、香港、シンガポールを経てインドのカルカッタへ入り、インド博物館長のタリシ、アンナンデール、動物園長のブース等の援助のもとにガンジス川河口の三角州においてマンゲースの捕獲を行なった（岸田，1927）。当初、32頭を捕獲したが、捕獲時の傷や衰弱のため3頭が死亡し、結局29頭が持ち込まれることになった（岸田，1927）。ところで、渡瀬がインド向け出発した日は、沖縄毎日新聞と琉球新聞の両紙とも12月22日の横浜としているが、岸田（1927；1931）には12月24日に東京から出発とされている。もし、両者が正しいとなると、横浜から東京を経由して出発したことも考えられ、その場合は24日東京発を選択したことが想像されるので、渡瀬の出発は24日の可能性が強いと思われる。いずれにしても本土紙等を含めた今後の確認調査が必要と思われる。

1月20日付けの沖縄毎日新聞には、マンゲースの学名が掲載されている。「ハーベステス、マンゴー」とは *Herpestes mungo* を指すと思われ、後に渡瀬（1911）も「*Herpestes mungo* 又は *griseus*」の学名を用いている。Pocock（1937）によると、これらは *Herpestes edwardsii* に相当することか

ら、移入されたマンガースはハイロマンガースであったとされているが、冒頭で述べたとおり学名については未だ混乱がみられる。

沖縄島への移送 (1910年3月24日～4月13日の記事)

1910年(明治43)3月24日 琉球新報

◎マンガースの消息：マンガース輸入の爲め印度へ渡りたる渡瀬博士は癒よ同動物を手に入れたるを以て来月五日頃神戸着の便船にて携帯帰朝□旨通知し来れ□由

1910年(明治43)3月30日 沖縄毎日新聞

●大工廻技手マンガース：本県技手大工廻盛安氏はマンガース受取りの爲め神戸へ出張を命せられ昨日出発したり

1910年(明治43)4月5日 沖縄毎日新聞

●渡瀬博士及びマンガース：曩きにマンガース受け取りの爲め長崎へ出張を命ぜられたる大工廻技師は既に29頭の掛受を終へ昨日帰島の途に著きたる由なるかこれと同時に飼育実験の爲め帝国大学理科大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏は同時に来県する旨電報あるたる由多分本明日著県すべしと

1910年(明治43)4月8日 琉球新報

◎マンガースの消息：渡瀬博士の齎し来るべきマンガースは都合29頭にして同博士は大工廻技手と共に現物携帯今明日の便船にて来県の筈

1910年(明治43)4月12日 沖縄毎日新聞

●渡瀬博士の消息：飯匙蛇退治に特効あるマンガース捕獲の爲め印度へ渡航したる同博士は過日鹿児島へ来着したる由なるが今回携帯し来りたるマンガースは栗鼠に酷似せる小獣にて都合29疋程持ち来りたる由にて長さ七八寸位の野生のものなれど近□は余程人に馴れ身体も大に發育したりとなり

1910年(明治43)4月13日 琉球新報

◎渡瀬博士来県：理学博士渡瀬庄三郎氏は大工廻技手同行マンガース29頭を齎し本日平壤丸便にて来県の筈

◎両博士の歓迎会：今回来県の玉利渡瀬両博士の爲め明14日午後6時より風月樓に歓迎会を催す由

新聞記事や岸田(1927)によると、県は長崎に技手大工廻盛安を派遣し、そこで渡瀬を出迎え、そこから直ぐに沖縄県入りをしたとされている。そし

て、カルカッタより那覇まで51日間かかったとされている（岸田，1927）。渡瀬が4月13日の沖縄到着までの新聞記事には神戸、長崎、鹿児島の名が出てくる。平壤丸が13日に入港したことは当時の沖縄毎日新聞と琉球新報でも確認できたが、平壤丸は大島、鹿児島、神戸、大阪行き（経由）とされており、長崎は経由地にはなっていない。出迎えに向かった大工廻技手の派遣先も神戸から長崎に変わっており、曖昧な点が散見される。この部分については本土紙も含めた検討が必要と思われるが、少なくとも渡瀬が沖縄に到着したのは13日という点は明確になっているといえよう。

4月12日の沖縄毎日新聞には捕獲されたマンガースの大きさが「長さ七八寸位」と記されている。前出の1月22日の琉球新報では「体長尾を除き一尺四寸四分」、さらに後出の4月14日の沖縄毎日新聞では「体長一尺二三寸」という記事がみられる。それぞれを換算すると、「長さ21~24cm」「体長尾を除き44cm」「体長36~39cm」となる。記事にある「長さ」や「体長」という言葉の定義と併せてどの様にしてこれらの数字を見いだしたかは不明である。

マンガースの到着（1910年4月14日～4月16日の記事）

1910年（明治43）4月14日 沖縄毎日新聞

●マンガース着：既報の如く印度産マンガース29頭は昨日平壤丸にて到着 姑く農事試験場にて飼育し渡名喜島に放飼し其効果を試む由なり今マンガースに就て聞くに産地は印度にして我が日本に移入するは全く今回沖縄に飼育するを嚆矢とす該獣は恰も鼯大の小動物にて一見頭部の形体にして色は所謂全鼠色体長一尺二三寸首頸割合に長大上下左右に轄輾せしめ頗る温順の相なり尾は割合に太く長く一尺程あり マングースの特徴は肉食を常とするにありて印度にありては蛇と鼠を捕食しつゝあり故に本県に放飼せば甘蔗に大害ある鼠を除去し危険なるハブを食するを以て本県にとりては有用なる動物にして渡瀬博士の労を多謝せざるべからず然共其播殖力は1頭毎年4頭位の仔を産し蛇鼠の絶対皆無となる時は畜類の危害を醸さずとは思はざるべし幸ひマンガースの飼養の如何によりては県下の幸福は此の上なかるべし且つ本明日位南陽館前農事試験場にて実地の試験を行ふべしといふ

- 渡瀬博士来沖：曩きにマンガースを携へ来県すべき由を報したりし帝国大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏は昨日の平壤丸にて来沖浅田旅館に投宿したり
- 両博士の歓迎会：昨日入港の平壤丸にて来県したる玉利渡瀬両博士の歓迎会は本日午後6時より風月樓に於て開催する由
- 渡瀬博士マンガース：渡瀬博士はマンガースを携へ来沖直ちに農事試験場を訪ひ飼養に関し橋本農商課長、中目、倉賀野、技師佐伯、大工廻技手を打合せ安里なる試験場第二農場を視察したり
- 玉利渡瀬氏の講話：本日午後2時より那覇尋常高等学校に於いて私立教育会発企となり今回来県したる広島高等農林学校長農学博士玉利喜造氏及び東京帝国大学理科大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏の講話ある由にて傍聴隨意なる由
- 大工廻技手帰庁：マンガース受取りの爲め長崎県へ出張中なりし技手大工廻盛安氏は昨日帰庁したり

1910年(明治43)4月14日 琉球新報

- ◎両博士の講話会：教育会の主催を以て本日午後2時より那覇高等小学校内にて東京帝国大学理科大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏及び鹿児島高等農林学校長農学博士玉利喜造氏の講話会を開く由
- ◎マンガースの試験：マンガースは多分両農事試験場の中より適當の場所を選定し相當の設備を施して試養せらるゝ筈なるが近日の中に飯匙蛇及び鼠を求めたる上農事試験場の事務室内にて試験を行ふ可しと
- ◎渡瀬博士来県：渡瀬博士は印度地方より携帯のマンガース29頭を齎らして昨日来県浅田旅館へ投宿、昨日は県庁訪問の後マンガースの試験地を選定の爲め久茂地及び安里の両農事試験場を觀察せり
- ◎両博士の慰勞会：官民有志者の催しにて本日午後六時より風月樓に於いて来県中の玉利農学、渡瀬理学両博士を招待し慰勞の宴を催す筈

1910年(明治43)4月15日 沖縄毎日新聞

- マンガース試験：本日午前10時より南陽館前農事試験場に於てハブを放ちてマンガースの捕蛇試験を行ふ由
- 黒岩農学校長出張：国頭農学校長黒岩恒氏は校務を帯びて昨日の運輸丸にて出覇池畑旅館に投宿したり
- 両博士の歓迎会：玉利、渡瀬両博士の歓迎会は昨日午後6時より風月樓に於て開かれたり会するもの80余名□客十二分の歡を尽して散会せしは午後11時頃にて頗る盛況なりき
- 両博士の講話：昨日午後2時より那覇尋常高等小学校内に於て私立沖縄教育会主催となり目下来沖中の東京帝国大学理科大学教授理学博士渡瀬庄

三郎氏及び鹿児島高等農林学校長玉利善造氏の講話ありたるか傍聴者多数にして師範学校生徒其他無慮3百人午後4時半閉会したり

●渡瀬博士の講話：琉球付近島嶼に在りては鼠及びハブの棲息夥しく此れが為めに沖縄の殖産上最も憂慮すべき現象たり一体有害動物を分類して二となすことを得べし一は人類の改化に従ひ減するもの一は改化に従ひ増加するものにして即ち山に□住して日夜野生するもの他は他に依□して生命を維持しつゝあるものなり鼠の如きは即ち□者に展するものなり本県鼠に二□ありて一は南亜細亜の原産に属するものにして同地は□県と同じく砂糖甘藷の産地なるが故に鼠の繁殖に最も好適にして農業の進歩と共に益々増加する形況なり当県に於ても其状況を一にするが故に遂に□に伝播するに至りしものなり　ハブは本県固有の産物にして好んで鼠を捕獲して食するものなり故に農業の発達と共に鼠群□増加に伴うてハブの増加するは勢の然らしむる所にして此等の繁殖状態が第一位に寄生物として鼠を産じ第二寄生物としてハブ□増殖するは亦自然の配置ならざるべからず
蛇という字は支那に於ては人の傍らにハブの将さに噬吐せんとする象形文字にして即蛇なり尚亦蛇と鼠は互いに相距るべからず關係に立てるものなることを知らざるべからず　マンガースは即鼠や蛇を食とするものにして第一の実験が頃□19疋を印度に放飼したるに其結果10年を出ずして年々150万円及至200万円の農作物の増収を□示したるは好適例たるべし　マンガースは其形態狸に近く且つ河豚鯨の如く見へ突□して生活す殆んど形は鼠に似たりといふべし然共元來切□動物に非ずして肉食獸なるが故に此亦著しき相異なり而し□各をベジー、ミウル、ナタラと称す其繁殖力亦強盛にして10年14、5年の内には或は蛇鼠を食盡したるやは知れざるも若し多数の産出を見れば或は皮及び皮毛は亦有用なる工業品たるべきか
住居は七八疋群棲するものなる故放飼する時は善く住居を見定め標札の如きものを樹つる方可ならん

今如何にして蛇を捕ふるかといふに先づマンガースは蛇の将さに打たんとする時は互いに直立の姿になりて全身の毛を突立て然る後蛇の周囲を囲り歩き機に処して首頸に噬み付くものなり決して蛇の為めに打たる、氣遣はなし尚委細は遠慮なく質疑あらんことを望む

1910年(明治43)4月15日 琉球新報

◎渡瀬博士の講話：当地は鼠も飯匙蛇も共に多し何故に多きかは殖産上のみならず學術上面白き問題にして余は動物學者として此問題に多大の興味を有するものなり今其多き理由と駆除の方法とに就き講和を試みんと欲す
◎動物にして人間に害するもの之を分けて二種類とす可し今吾人が野宿などの如き動物の立場を侵す時生存競争の必然的結果として蚊、蠅其他種々

害虫など□り阿弗利加等の□き荒漠の土地にては幾多の小獣に加ふるに獅子虎の如き猛獸來つて吾人を害すが如き種類のものにて土地の開拓されざる間は人間の住居を侵して害を加ふる事甚さ□人智次第に進み世が文明になりて人類に自衛の途が講ぜらるれば次第に其害を減ずるものなり然るに今一つのものゝ人間の生活の階段が進むにつれて其害往々甚しくなるものにて鼠、蠅、鳥、□の如き人間の住居を視て襲來するものなり故に害獸は之を前述の二種類に區別して駆除の途を講ず可きなり

◎例へば耕作物に害するものは農業の進むにつれて益々繁殖する事獅子虎の如き野獸とは大に趣を異にす此等の害獸は□□人間に寄生するものと云ふ可く人間を害するもの、の中にも完全なる寄生動物と不完全寄生動物と野生動物の三者に區別するを得べし

◎本県の鼠は余の見るところにては本県固有の野生動物にあらずして往事交通の便を利用して多くは南亞細亞より移入せられたるものならん而して今日の如く繁殖したる所以は氣候温暖にして農産物豊饒従つて亦鼠の食物多きにあり故に本県が氣候暖かにして農産物の豊富なる間は尋常の手段にては到底鼠を□き□す□□はず鼠は三ヶ月にして成熟し年に四回繁殖し一回に多きは20匹も子を産むものにて□□人間の一代は鼠の30代に当たり加ふるに一代に6匹及至20匹も産むものなれば其繁殖力の強盛なる實に驚く可きものなり今や沖縄に止らず世界到る處鼠害に苦しまざるはなし而して此の急連なる繁殖は實に人間が間接に之を助けつゝあるものに外ならざるなり

◎飯匙蛇は琉球の特有にあらずヒマラヤ地方にあり台湾にあり唯多少其性質を異にせるのみ彼は総ての生物を食ふも好んで鼠を食ふものなり故に農業の發達今日の如くならざれば鼠も今日の如く多からず飯匙蛇も亦従つて今日の如く繁殖するを得ざりしならん現今の如く繁殖したる所以は鼠の多きと穴居するに屈強なる石垣の多きに依らずんばあらず

◎鼠は人家の付近に集り飯匙蛇は鼠を追ふて來る、往年余の友人が琉球群島の其離島へハブの毒を研究す可く旅行せし時土地の父老は飯匙蛇を全滅させるのは有難くなしと云へり其理由とする所は飯匙蛇は人間を害する事□ばなれど其代り甘蔗畑に行いて鼠を喰ふを以て□□人間の恩人なりと云ふにあり然らば鼠を駆除せば如何と問ひしに鼠を全滅せば今度は飯匙蛇が人家に襲來するに依り之も甚だ困るとの話なりきど誠に氣の毒な有様なれど學問上より云ふ時は實に面白き事例なりと云ふ可し

◎印度にカンヂスの大河ありヒマラヤ山より流れ洪水の場合には河水の氾濫恐る可きものあり然し土地は極て肥沃なるが同地は広漠たる平地の間に所々丘陵ありて人は之に住居を営み丘陵の上に少なきは二三十戸多きは五十戸程の村落を□せり之れ洪水の氾濫を避けんとするものにして此洪水は肥料を移入して土地肥沃、米穀の産出極めて豊饒なり然るに米穀は鼠の繁

殖を助け鼠は蛇が繁殖するを以て蛇の禍害頻々として絶〇ず1年に2万及至3万人の斃死を見るに至る天気の際鼠が田に集まれば蛇も田に行き洪水の際は共に丘陵に集まる年々田と人家の付近を往来して之が為めに損害を受け今に至って如何ともする能はず

◎印度の蛇はコブラと云ひ長さ四尺位を大とし印度馬來半島及び我台湾に産す怒る時は襟を広げて扁平となり其状匙の如し故に飯匙柄はコブラを指せるものにて之を当地のハブに当つるは間違ならん支那人は古来大に之を恐れたり支那にて安否を問ふに他なきやの語あり他は古字佗に作る它是象形文字にしてコブラに象れるものなれば他なきやは〇〇蛇に噛まれないかとの意味より出でたるものなり (未完)

◎昨日の講話会：昨日午後2時過より那覇高等小学校内にて両博士の講演会を開かれたるが会衆四五百人、先づ渡瀬博士のマンガースに関する講話あり次に玉利博士の鹿兒島高等農林学校に関する演説ありて5時頃閉会したり講話〇項は渡瀬博士の分より号を追ふて紹介する事とす可し

1910年(明治43)4月16日 沖縄毎日新聞

●マンガース試験／好結果なり：昨日午前10時より南陽館前県立農事試験場内に於てマンガースの鼠及びハブの捕殺試験を行へり試験場は一室を硝子障子にて張り詰め四辺を囲むと同時に一般の観覧に供へたりも定刻前より各官庁員及び一般人の参観人多数押し掛け雑鬧を極めぬ

先づ一般にマンガース一頭を放入したるに網籠中より放されしこと、て右へ左と跳ね廻も頗る元気の態なり折節一頭の鼠を躍り込みしむやこれを見つけたるマンガース先む飛ぶか如くに抱き付たると思〇もあらず鼠は一度二度身慄はたるのみにして絶命せしめたるは有〇に急所を外さぬマンガースなり 続いて一頭のハブ包を携へたるハブ採り先生戸を押して〇れり先生はハブを食い相な顔して風呂敷包を広げは中よりハブ一頭を生ける〇に取出し首を足指にて挟んで針糸に繰れる糸を切放手にて蛇首を捉げて打放せばハブは長き該を輪にグルリと巻きて頭を後身にしてイザ好敵と身構ひたり マングースは其れとも知れず後より寄り付けば茲〇と計りにハブは躍り上るや機敏なるマンガースは体をヒラリと落ち述べば不意に遣られたか疵鼻上をハブは刺されたるは気の毒これより同勢二疋のマン先生の援兵と放ちしも其程の活動は見ずハブ師をしてハブの位置を転換せしめしも蛇は終に壁の利を籍りて一角に〇しマンガース容易に近くべからず午後0時迄何のことなく茲を引上げ更に県庁会議室に一室を仕つらへ再試験に着手したり午後1時例の如く著手マンガースを3疋網籠中より取出すやハブは亦勢良げに身構へり小いと思ひしマンガース今迄周囲に走り狂ひしがハブを目懸るや否や十分隙もあらず天の如くハブの後頭飛び付して

輾轉蠢くや否や流石のハブも身を慄はし體を長く動しむるのみ同時に他のマングースも飛び付き尾を食ふやら體を無二無三に肉に食ひ就き頭は食ひ切つて腹中に納め飯を喰ふが如くに捕殺したりこれを見たる渡瀬博士今迄片唾を呑んで結果奈何れと手に汗を握り居りしか□般の結果に際して拍手愉快を叫べり有繫は学者又結果の是否に任せる博士の熱心の程想遣られて□かし後其狀況を影撮して此内亦第二回の実験に取懸る筈なり

●玉利渡瀬博士の歓迎会：一昨晚風月樓に於ける玉利農学博士、渡瀬理学博士の歓迎会は官民の重なるもの60余名出席し先づ河村事務官立って玉利博士が鹿児島高等農林学校長の身を以て幸ひにも今般本県に渡来せられ日本の南西部に於ける農林上の位置關係を設示せられ且つ親しく本県に熱帯植物園を設置するの实地踏査を遂げられ又た渡瀬博士が遠く印度地方よりマングースを携帯せられて自ら当地に渡来せられ其の養護上の方法注意を教示せられしは必ずや本県の産業上に多大の効果あらんことを信じて我々□県の官民が大に喜び以て深く感謝する□なり而して今晚我々□両博士と一堂に会して歎□以て其の旅情を慰する機会を得たるは頗る満足する所なりとの意を述べ次□玉利博士は□も懇切なる優待を謝する旨を語られしが両博士の前には会衆の其の杯を得て且つ該博にして興味ある動植物及び産業上の□話を聞いて喜ぶもの絶へず充ち満ちたる状情ありしは此の種の会に於て多く見ざる所の好況なりき

1910年(明治43) 4月16日 琉球新報

◎渡瀬博士の講話：◎鼠と蛇の吾人に禍するもの極めて莫大なるに今に駆除の方法を講ずる□はざるは悲しむ可し凡□世界の事は人為を以て□す可きあり動かす可らざるあり日月星辰の進行の如き天然自然の法則などは人為を以て如何ともする能はざれど蛇鼠と人類の關係及び其繁殖の如きは半ば人為的にして他の自然の現象とは大に趣を異にせるを以て人為を以て駆除し得ずとも限らざるべし

◎之等の動物を駆除するに二法ありて東洋西洋との間に其手段の異なるものあり東洋にては主として薬品、又は□の如きものを以てすと雖其繁殖力の強盛なる□も此種の方法にては間に合ひ難し然るに西洋にては自然の敵を利用す即ち害虫あれば其敵を求め之を繁殖して害虫を駆除せしむ之れ即ち博物学の進歩せる所にあらざれば企及し得ざるものあり

◎瓜哇に於ては即ち此法に依って駆除に苦心したる時代ありき即ち鼠を駆除する為めに最初南米地方より一種の蟻を移入し来つて鼠を吞まじめんとしたるも失敗に帰し、次に赤蟻の□□なるを輸入したるも予期に副はず鼯を輸入したるも思はしくなく最後に1種の犬を輸入して梢々成功に近きを得たるも甘蔗畑を奔走するの結果刺の為に目を損じて多く用を為さず非

常に困却せる所へ此のマンガースを得最初19頭を移し来つて盛んに繁殖を
□りたる結果は見事に成功を來たし今日に於ては之が爲めに砂糖丈にて
1年に150万円の増穫ありと云ひ其他珈琲などの如き鼠の爲めに栽培し得ざ
るもの盛んに之を営むを得たれば其利益莫大なりと云はざる可らず然し今
日にては繁殖過度に失したる爲め鼠は既に取り盡くしてマンガースの食物
乏しき爲め□、又は甘蔗に掛り若くは又共喰ひを為すが如き程度に至れる
は大に鑑む可き事なり

◎マンガースは形体は鼠鼯に似たれど齒は解剖学上明かに肉食動物たるを
示し其性質はもつとも狸に近きものあり原産地は阿弗利加なれど古來印度
にも多し学名を「ハルベストス、マンガー」と云ふも其名称頗る多く「ニ
ュール」とも「ペジー」とも「ナグラ」とも云ふ而してヘルベストスとは
蛇を食ふの意味にて支那に於て食蛇鼠と命名せると同一轍に出づ印度にて
は家庭にも多くマンガースを飼養せるが能く人に馴れ家庭の慰物として□
伽語の中心となり又は教訓の材料として取扱はれつゝあり

◎ナイル河畔に埃及文明の勃興せし時代河畔の平野は穀物豊饒にして世界
の宝庫と歌はれたるが其代り鼠も亦多きより猫を以て其駆除を□れり猫の
飼養は実に埃及より起る、然れども川には鱈魚多くして人畜の禍害頗々た
るを以てマンガースを繁殖せしめて鱈魚の卵を食はせたる事あり當時之を
イクニューモン（希□語）と称せり英語の之を訳してトラッカー（追跡者
の意味）とする所以のものは鱈魚の跡を追ひ廻はりて卵を奪ひ去るより出
てたるものならん

◎マンガースは其性極めて敏捷、殺伐にして好んで鼠、蛇及び其卵を食す
るを以て本県にても適當の方法を以て之が繁殖を□り野鼠及び飯匙蛇を駆
除するには極めて好都合ならんと信ず其の蛇と戦ふ時の如き蛇の撲たんと
して身構へたる周囲を疾走し隙を視つて頭に噛み付く其挙動極めて敏捷な
ると共に一旦噛み付きたる以上は殺さざれば止まざるものなり

◎マンガースは斯く珍奇なる動物なれど氣候食物其他境遇の彼に適當なる
ものあるに於ては無限に繁殖するものにて如何に有益の動物なりとも分外
に繁殖するに於ては□つて之を持って余す事印度、瓜哇、布哇の如きに至る
を以てマンガースの繁殖を□るには其程度及び時と場所を考えるを要し若
し適度以上に繁殖する場合には其繁殖が抑ふる丈けの手段は豫め講究し置
かざる可らず然れども實際に於ては其毛皮利用の道もある可きを以て如何
に繁殖しても全然無用物となるが如き事は無かる可きか

◎余は夏季ペスト流行の時期の如きマンガースを内地に齎して開港地の倉
庫等に於ける家鼠の駆除を試むるの希望を有す之は強ち不可能の事にあら
ず如何となれば桑港にて余はマンガースを持ち廻り家鼠1匹5弗の賃金を
得て營業とせるものを見たればなりマンガースは兎に角重宝な動物にして

馴るれば猫よりも人に懐くものにて蛇鼠を征伐するのみならず一方にては又家庭の慰物ともなるを以て余は成と可く各戸に飼養せられん事を望む而して今や鼠の問題極めて盛なる時節柄なれば余は日本の為めのみならず世界の為め諸君が充分の同情と注意を以て其繁殖飼養に尽力されん事を切望す (完)

◎マングースと飯匙蛇の試合 (マン君の大勝利) : 渡瀬博士が遙々印度から齎らした遠来の珍客マングース君は愈よ昨日を以て当地名物の飯匙蛇と試合をやる事となった午前10時頃農事試験場の事務室の一部を片付けて硝子障子を立て連ね此処を試合の場所に定め□渡瀬博士や河村事務官以下県庁の各課長庁員が立ち会ふて先づ鼠から捕らせる事にする左う□うする中に弁護士が来る実業家が来る新聞記者来る郡区役所員来ると云ふ有様皆硝子戸の外に立って物珍らしげに見て居る、そこで先づ一頭のマングースを引き出して鼠を放つてやったら手もなく飛び掛かって喰ひ殺して肉を嚙じり始めたので鼠ならば訳はないから之からが愈々飯匙蛇の真剣勝負とあって飯匙蛇取りに命じてハブを囲の中に入れてさせた、サア之からだと思って居るといつの間にか此の開闢以来の珍試合を見物しようと云ふ連中が潮のやうに押し掛けて来て事務室の周囲は忽ち人の黒山となって大騒ぎして居る、所がマングース先生はハブの居るのに気が付かないやうで唯周囲のワイワイを迂散気に見て居るのであったが飯匙蛇を包んで来た風呂敷を嗅ぎ付けて始めて気が付いたらしくノコノコと其側にやって行くとハブは突然身構を為してマン君の鼻先を撲つ血がだらだらと流れる、不意を突かれてマゴマゴして居ると今度は背中と来るマングース先生見苦しい不覚を取って再び向ふ勇氣もなくなって外に逃げ出そうとするばかりであるソコで外の三匹を籠から出して飯匙蛇に向はせたが唯気合が窺つて睨みつこをするばかり□□と思はしい勝負もない兎角する中に窓の外では群衆が押し合ったり怒鳴ったり頻りと騒いで居るものだから外来のマン君は兎角遠慮勝ちで思ひ切った働きを見せそうではないので之では駄目だから県庁内でやり直そうと云う事になり一切のものを県庁に引き上げ会議室の一隅に再び元のやうな仕掛けで硝子障子を立て列ね、蛇とマングースを三頭程入れた、二匹の奴が周囲の群衆にたがてマゴマゴして居る間に一匹のものは直ぐ□身を躍らせて既に飛び掛かろうとする飯匙蛇をさるものだから逸早く身構へを為し得意の鎌首を真申に振りかざし毒牙をむき出してサア来いと待ち構へる、マン君も後足で直立し全身の毛を逆立てて隙もあらば飛び掛かろう云ふ勢ひ、周囲の人々はドウなる事かと手に汗を握って居る中に飯匙蛇の方から其高々と振り上げた鎌首をマン君目掛けて勢ひ鋭く投げ出したと思ふ間もあらばこのマン君は素早く身をかはすと共に直ぐ□□鎌首に噛み付くそこ

で飯匙蛇は七転八倒頻と振り放そうとするけれども中々放さず凡そのもの二三分も経ない中に見ん事往生して仕舞ったのである、マン君の戦闘振りの機敏な事と云ったら夫こそ電光石火鎌首三寸にして身を翻へすと云ふ勢ひだ然し飯匙蛇だってマン君の敵としてそう馬鹿にしたものであるまい今は昔し故伊藤公が当地に来遊された時ハブと猫を檻の中に入れて立合はせた事があったそうで時の随行者森□南氏は其悲壯の光景を□蛇行に歌って居るが今度の催も亦之に劣らざる晴れの試合である然るに吾輩は此の晴れの試合に於て見事遠来の珍客マン君の大勝利に帰した事を謹んで天下の為マン君の為に祝するのである、ト饒計な事に気を取られて一寸云ひ忘れたがハブの為に二度も噛まれたマン君は毒に当つて死ぬ事かと思ひの外相変わらずの元気で更に別条のない所を見れば多分ハブ毒には不感性だろうとの話益々以て結構な次第だ

◎マンガースの飼養：マンガースは安里農事試験場に於て一部は金網を囲ふて飼養し一部は甘蔗畑に放飼する計画にて又其一部は国頭農学校に貸與飼養せしむと云ふ

◎黒岩校長の出覇：黒岩国頭農学校長は一昨日入港の便にて出覇池畑に投宿せり

マンガースは4月13日に沖縄島に到着した。到着直後の記事には渡瀬に対する感謝の気持ちが現れている。また、歓迎会には多くの民間人や県当局関係者が出席しており、ハブやネズミ駆除への期待ばかりでなく、マンガースが増えた暁には毛皮を利用しようという発想まで出ている。

4月15日に行なわれた実験には当時の県事務官三氏（河村弥三郎、和田勇、岸本賀昌）、各課長、係員、渡瀬庄三郎、玉利喜造、那覇区長、県会議員、郡役所員、弁護士、実業家、新聞記者の他老弱男女が参観していたらしく（岸田，1927）関心の高さを伺い知ることができる。

新聞記事にもあるように、ハブに咬まれたマンガースが少なくとも1頭以上いるはずだが、咬まれた後のマンガースについての記述は無い。それに、19日までの配置状況を見るとみんな生存していたことになっている。記事のとおりハブに数回咬まれているのでしたら、通常の動物であれば何らかの影響が発生すると思われる。しかし、マンガースの血清中にはハブの出血毒に対する抗体の存在が確認されていることから（Tomihara et al., 198

7)、当時ハブに咬まれたマングースは記事のとおり影響がほとんどなかったことも考えられる。一方、名護に持ち込んだ4頭のマングースは、ハブとの対戦による酷使で全て死亡したとされているが(伊波, 1966)、それには毒の影響が全く無いという状況下では考えにくく、何らかの影響があった可能性もありえる。毒の影響については当時の資料の詳細な調査が必要と思われる。

マングースの配置 (1910年4月17日～4月21日の記事)

1910年(明治43) 4月17日 琉球新報

◎マングース余聞：マングースが昨年渡瀬博士が来県された時に島尻郡に鼠が多くどうも農作物を害して困るとの話が始まった夫ならば印度に斯う云ふ動物が居る鼠の駆除なら訳はないから僕が世話してやろうと云ふ事になって今度博士自身が□々出掛けて持って来られたので元を云へば一場の座談に過ぎなかったのであるそう▲そこで元来から云へば野鼠を取らせるのが目的であるけれども重宝な事にはマングース先生蛇の征伐を副業にして居るのでハブの多い当地では益々以て結構な奴だと云ふ事になり一昨日飯匙蛇と立合せて見たら物の見事に退治して仕舞った▲尤も最初の中はマン君も旅の疲れはある群衆は騒ぎ立てる加之に飯匙蛇とは初対面であるから一寸まごついたやうな気味はあったが少し呼吸を覚へたら何の朝飯前と云ったやうな工合であった▲たゞ祖先代々印度の毒蛇コブラとばかり戦って来て居るから今度の戦闘振りも最初の中はコブラに対する型であったが一寸勝手が違ふのを見て気抜けした気味があったとは黒人の観察談である▲之か事実であるならばマン君も追々ハブに対する戦術を考へるやうになるだろうし又現に二回も噛み付かれたものが今に至るまで少しも毒に感ぜず平気で居る所から見ても飯匙蛇が到底マン君の敵にあらざる事が分かる▲印度では家庭に養って□伽話や教訓の材料にして居るそうだ其一例を云へば或婦人が乳呑児をマン君に托して外出した帰って見ると子供は喉を噛まれて血だらけて死んで居る吃驚してマン君を見たら之も口は血が付いて居るので吃度此奴が噛み殺したに違ひないと云って直ぐ様マン君を叩き殺して仕舞った▲所が後で気を付けて見ると側にコブラが血だらけに噛み殺され居るのでハハア之はコブラが嬰兒を噛殺したのをマン君が讐を取て呉れたのだと云ふ事が分り大に後悔したと云ふ話があって之を以て人の軽卒を警める教訓にして居るとは渡瀬さんの演説の一節だ▲家庭に飼ってよく懐けると猫よりも馴れて家族の布団の中にモグリ込んだりする又ポッケ

ットの中に入れて外出なども出来るので大に慰み物になるそうだが其代り迂っかきすると食卓の御馳走などを浚って逃げるそうだ現に博士なども印度で食事の際一寸側見をして居たら何時の間にか宿屋のマン君が飛んで来て皿のピフテキを勝手に頂戴して逃げたと云ふ話であるマア猫の極く素ばしこい奴と思ったら間違はなからう

1910年（明治43）4月18日 沖繩毎日新聞

- マンゲース試験地：29頭のマンゲースは其飼養試験を行ふ爲め首里城那覇泊泉崎農事試験場及び国頭農学校に二頭を飼育試験する筈なり
- 渡瀬博士：渡瀬博士は昨日正午より首里城に同城内にマンゲース試験地設定の爲め同地観察に起けり
- 黒岩校長：黒岩国頭農学校長は昨日渡瀬博士同道首里城内マンゲース試験地選定の爲め同地に趣きたる由

1910年（明治43）4月19日 沖繩毎日新聞

- 渡瀬博士：渡瀬理学博士は昨日倉賀野技師と共に首里城のマンゲース試験地に赴き午後4時帰郷したり本日の薩摩丸にて出発する筈
- 黒岩校長帰校：出覇中なりし国頭農学校長黒岩恒氏は昨日の運輸丸にてマンゲース四疋を携へ帰校したる由

1910年（明治43）4月19日 琉球新報

- ◎マンゲースの配置：今回移入せられたるマンゲースは雄14頭雌15頭なるか如何にして之を配置するかと云ふに昨日渡瀬博士倉賀野技師立会の上安里農事試験場の甘蔗畑に雌雄二対を放飼し二対は黒岩校長携帯昨日国頭農学校へ□らしたり猶ほ首里城内にも放飼する為渡瀬博士は昨日実地の視察を遂げたるが多分本日二対を同城内に放つ可く其他糖務局に於ても構内の甘蔗試験地に放飼せん事を希望せる由なれど之は未だ決定し居らざるが如し斯くして以上各地に配置したるものの外は常分安里の試験内に小舎を設備して飼養繁殖を計る筈因に黒岩校長はマンゲースに対する学術的研究に従事する事となれるか雌雄二対を得て恰も愛児を求めたかの如く大満足を以て先日名護に携帯し行きしか先日帰校の上は時を移さず生徒に命じて小舎を設備せしめ最も大切に保護飼養する考なり云々と語りたり
- ◎黒岩校長帰名す：国頭郡農学校長黒岩恒氏昨日の便船にて出発帰校せり

1910年（明治43）4月20日 沖繩毎日新聞

- 首里城にマンゲース：昨日午前9時渡瀬博士倉賀野技師大工廻技手同道首里城に赴きマンゲースを同区各小学校生徒に見物せしめたる後午前11時雌雄四頭共神廟殿後方の藪中に放したりと

1910年（明治43）4月20日 琉球新報

◎首里城内へマンガース放飼：昨日午前10時頃渡瀬博士、倉賀野技師、大工廻技手首里へ出張して城内へマンガースを放飼する□になり各小学校生徒へ観覧せしめ次で同11時ごろ神廟殿前の藪中へ4頭放飼したるにマン君はさも嬉しき面付にて何処となく遁走し去りたりと云ふ

◎渡瀬博士の陳列所巡観：昨日午後4時より来県中の渡瀬博士と大工廻技手随行にて物産陳列所を巡観□琉球産反布類視察の後八重山上布を購求せられしが如おなき大工廻技手は今しも博士の上布を取上げ緋の模様などスッカリオ気に召し居る所を見て取るや上布□殊の□質の説明中、之れは若し二代三代ですからねと博士の顔を打窺くと博士は一寸解り兼ねしと見□二代三代とはと問返す、大工廻氏ハッと言句に詰り窮せしを傍に見て居し安里書記が気転を利かし、イエ此上布は二代も三代も迄も持続きますと云ふ意味なのですと大工廻氏の二代三代に詳解を試みたので博士もヤット納得し大工廻技手も大に安心したそуд

◎渡瀬博士：渡瀬博士は明後日出港の馬山丸便にて帰京の筈

1910年(明治43)4月21日 沖縄毎日新聞

●マンいの配置決定：渡瀬博士の持参したるマンガース29頭は左の各所に於て飼育試験を行ふ旨決定したり

4頭 国頭農学校 4頭 西原糖務局

4頭 渡名喜島 4頭 安田農場

5頭 農事試験場本場

4頭 渡瀬博士持参

●渡瀬博士：渡瀬理学博士は昨日首里城及び安里農場のマンガースを視察して午後3時帰郷したり

岸田(1927)によると、県下におけるマンガースの配置は次のようになっている。4月17日沖縄県立農学校4頭(飼養)、4月18日沖縄県立農事試験場(安里)4頭(飼養)、4月19日首里城内4頭(放養)、4月19日農商務省沖縄糖業改良事務局(西原)4頭(飼養)、4月19日渡名喜島4頭(放養)、4月19日農業試験場(久茂地)5頭(飼養)の以上25頭が沖縄に、残りの4頭は渡瀬博士が大学に持ち帰ったことになっている。沖縄県立農学校については、18日に黒岩校長によって持ち帰ったことが記事に記されているが、前述の岸田(1927)では17日となっているのは、配置の決定または引き渡しの期日と実際に運んだ日にちとのずれによるものと思われる。同様な日にちの

ずれが後に述べる渡名喜島のところでも出てくる。

その後（1910年4月21日～6月9日の記事）

1910年（明治43）4月21日 琉球新報

◎マン公人家を驚かす：安里農事試験場の向ふ側、街道を隔てた道端のさる人家にツイぞ見掛けた事のなき奇怪な動物こそ現はれたれ、時は朝の八時頃件の動物が庭先よりノコノコとやって来るのを家の婆さんが見付け出して目を丸くしハテ鼠とも付かず猫ともつかず□て見掛けた事もなければ先祖代々の云ひ伝へにも斯う云ふものは無かった覚へ、何にしても奇怪至極と家中のものを呼び集めて見せたるに皆な皆な呆気にと取られて見□る、許りなり免角する中に件の怪物も矢張りげん相な面してこなたを見返して居りしが暫らくして何処ともなく逃げ失せて仕舞った、後で家族は大評定を為し斯う云ふ奇獣の現はれたのも何かのお知らせ之れは黙って居る訳に参るまいともって例の三世相を探がし廻はりて□ひをして貰ふやらお呪ひをするやら大騒ぎとなりしを試験場員が聞き付け其家に立ち寄りて委細を聞き取って見れば例のマンガース先生に相違なきにぞ之は怪獣でも何でもなし鼠とハブを退治する珍重な動物なればお呪ひ所か随分大事にして貰い度しと説き聞かせたれば家のものも始めて事の次第が分かり扱てはそうかと安堵の胸を撫で下したと云ふ事なり厄鳥として支那にも服という鳥があれば沖縄にも「コカル」と云ふものあり之に襲はれたら不祥の事が起るものとして忌み嫌ふたものにて総じて縁喜を気にするとは珍らしくもなけれど假令間違ひにもせよ印度では大持ての乃公が遙々沖縄まで来て□花でも撒かれては堪ったものでないとマン公がこぼしたかどうか夫処までは聞かず

◎マン公と渡名喜島：マンガースは渡名喜島にも二対放飼せらる、筈、同島は飯匙蛇殊の外多きを以って之を駆除する必要より云ふも又マンガースの繁殖の程度を確むるには離島を便とする事情もありて旁す同島を試験地の一に選定する事に内定せるもの、如し

1910年（明治43）4月22日 沖縄毎日新聞

●マンガース城外に出づ：曩に首里域内へ放飼されたるマンガースは一昨日及昨日両日共首里織工場の門側に現はれマゴツキ居るを人力車夫や小供等か数多集まり竿或は石を以て追ひ散らし居たる由なるが珍らしき者をイヂメるのは子供等の常とはいひながら万一僕殺してもした時は博士の切角の功勞を水泡に帰せしむるに至るべし当局者たるものは何とか其の保護方法を講ずべきなり尚ほ学校の方にては生徒等に対し充分に諭す所あるべし

●安里のマン君：安里なる県立農事試験場第二農場に放ちたるマンガースは雄雌二頭つ、二組となり四方に彷徨しつ、あり今迄は東方に徘徊して人民を騒かしつ、あるか昨日は更に西南方に駆け廻りつ、ありて村民の騒動一方ならざる趣あり或は鳥尻の近傍に侵入する筈なれば一般民の注意ありたしといふ

1910年(明治43)4月22日 琉球新報

◎頑童マンガ公を苦しむ：昨日の午前10時頃首里は織工場の門外に3、40人の群衆にて何やらワイワイと立ち□げるを何事ならんと立寄りし見れば城内に放ちたるマンガース一匹現れ出でて街上を迂路迂路せるを頑童が織工場入口の溝の中に追ひ詰めて之を捕へんと□騒ぎ居る所なり中には小学校の児童やら車夫やら通行の男女やら彼是四十人はがり集まりて評判のマンガ公を見んとて物珍らしげに集まれる間に頑童等は溝の両方より石を投げるやら竹を差し入れるやら或は溝の上でトントンするやら頻りにマンガ公を追ひ出さんとして居る所なるに□記者は頑童等を捉へてそう苛めてはならぬと云ひ聞かせたるも何もいぢめはしませぬ唯マンガ公を見たいばかりですとの返答にて相変らず竹で突いたり石を投げたりして居たりき其後の成行に就では確むる所なきも聞けば一昨日もある付近にてマンガ公を追ひ廻はして居りし由なれば□める人がなければ今後ドンナ目に逢はせるやも知れ難きに依り折角の動物に対して間違のなき様学校の先生や父兄などに於て充分の注意ありたきものにこそ

◎マンガースの配置：渡瀬博士の齎せるマンガース29頭の中、四頭は安里の試験場、四頭は首里城内、四頭は糖務局、四頭は渡名喜島に何れも放飼し国頭農学校に四頭、久茂地の試験場内に五頭を飼養、四頭は渡瀬博士大学の方に携帯し行く筈

◎渡瀬博士の熱心：今回渡瀬博士がマンガースを当地に移入したる□就ては其の学術的研究の結果を印度カルカッタの博物館長に報告する事になり居る由なるが之に対する博士の熱心は非常なものにて毎日首里城安里農場久茂地の農事試験場等を廻はりて放飼後のマンガースの消息を知るに努め配置以来一口も缺ぎたる事なしと云ふ

1910年(明治43)4月23日 沖繩毎日新聞

●中学校の講話：県立中学校に於ては昨日午後2時より田中海軍大尉、渡瀬博士、倉賀野技師の三氏を聘して講話会を開く聴某は同校職員生徒及首里小学校職員、役所員等にして講堂立□の余地なかりし田中海軍大尉先づ軍人的快活なる態度を以て海軍兵学校生活より同校にて教はる学科及科等を詳細丁寧に話し次に海軍兵器に就て水電に就いて、通信、航海運用術、兵種等を詳しく説明し終りて38年5月27日日本海大海戦の□戦談をなし其痛

絶壮快なる同大尉の□談は氏独特の雄弁を以て真に壯烈なる日本海々戦を見るが如く生徒をして躍肉□骨□威あらしめ折々急戦の如き拍手は満堂に響き渡りぬ次に渡瀬理学博士の蜚に就いて講話は氏の妙を得たる話振を以て趣味津津たる科学に関する講話は聴集をして少なからざる知識を得せしめき尚ほ博士の講話は次号に詳しく掲載する事とす、次に倉賀野技師は先□広島湾にて潜水艇と共に海底に沈みたる其の友人佐久間海軍大尉の性行に関する講話をなし氏の友人を偲ぶ□情の切なる話は□聴集をして□に□□せしめき

●渡瀬博士：渡瀬博士は昨日正午より中学校に於ける講筵会に臨み蜚の話をなす爲め首里に趣きたる由

1910年（明治43）4月23日 琉球新報

◎渡瀬博士出発：渡瀬博士は明日馬山丸便にて出発帰京する由

1910年（明治43）4月24日 沖縄毎日新聞

●渡瀬博士帰京：遙々印度より本県にマンガース29頭を持参したる東京帝国大学理科大学教授理学博士渡瀬庄三郎氏は熱心に本県殖産上動物学上の実地試育研究中なりしか愈々本日の馬山丸にて出発帰途に上がるべしといふ

●沖縄所感／渡瀬博士の談：渡瀬博士は本県否日本のマンガースの祖先となつて愈々本日の馬山丸にて帰京の途に著かれる記者は名残を惜しんで昨日博士を浅田の旅館に訪ふた丁度出立の順備といふので沖縄土産の反布や何かんと荷造りに忙殺せられて居らる、県庁からは大工廻技手が目をキョロキョロさせて手伝はれて居る恐入つたことで済まぬとは思たが無理に面談を需めた▲布哇の如し 沖縄に来まして見ると奈うも結構な土地柄で吾々は心□かに喜んで居るが之に沖縄は他府県と異つて吾々の学理的研究には趣味多く且つ材料も面白いものが数々である先づ気候の方から見ましても冬には左程寒からざる度合に誠に羨しい土地と思はれる此処に住んで居らる、宣教師のシュワルツ君等も頻りと恰も米領布哇の□で些つとも変りはないと談して居るられた私も左様思つて居るので御当県は山水地理の風光は絶往と云つて宜しい程で心から住んで見たい感じが起るのは無理は無いことである爾ういふことだから現今の布哇が大陸の米国や北国人が冬季に向つて避寒に流れ来る様に沖縄もこれからは日本の避寒地として随分賑かになることであらふと思ふ何も地理か遠いと言へば鹿児島への航路の汽船が頻繁で決して不便といふこふことでもないから好避寒地として将来は繁昌することだらふそれにしても先第一に▲旅館の設備 肝要である如斯なると現今の旅館では決して間に合ふものでないま少し旅館の設備を完全にするには最も必要なこと、信ずるのであるこれは頻りに諸君に希ふの

である▲風俗 の点に就ては今何れは斯ふと話す迄には至らない要するに一思索して御話することにせやう出京の序に面会の上綴と御話申上ぐることにしませう 時に泰視学の来訪あり教育会雑誌原稿の用談に就て談られ後荷造りと忙はしき様子なるより直ちに謝して辞した

●蛍の話／於中学校 渡瀬博士講話

<省略>

●□城のマン君 曩に首里旧域内に放飼されたるマンガースのツガヒは先日首里織工場付近に現はれ車夫や子供等におびやかされたる事ありしが此度は寒水川芝屋付近に出沒して鶏を驚かし居れりと

1910年(明治43) 4月24日 琉球新報

◎マンガース移入の動機：渡瀬博士が今回懇々印度まで出張してマンガースを齎し来りし事情に就ては充分に了解せられざるやうなれば今聞くまゝを伝へんに博士の今回印度に出張せられたるは他に動物学上の研究に関する用向もありたるやうなれど其主たる用向きはマンガースの移入にありと云ふても差支なきが如し而してマンガースに関しては昨年本県に來遊せられたる時の話が抑もの動機となり今回愈よ移入に決定せられたる次第なるが其目的はマンガースを日本に移して野鼠とハブとを駆除せんとするにありて差当り本県は印度カルカッタと緯度の相近き為め当地を以て試験地に選定せられたるものにて平常職務多忙の上に目下東京帝大学にては動物学教室新築中の事なれば建築の監督を為す必要もあり旁た大切の時日を費して博士自身懇々当地に携帯して其配置飼養の世話を試むる為めに暫時滞留するが如きは尋常事と云ふ可らず而して博士の志は専ら學術の研究、及び野鼠を駆除して天下の公益を計らんとするにありて之が為め博士自身は一文の利益をも受くるものにあらずと云ふ事情斯くなるが上に印度より当地に移入し来る迄にはマンガース1頭に数百円の費用が掛り居る訳なれば県民は天下公益の為め熱心に之を保護する所なかる可らず聞く所に依れば某小学校の如きはマンガースの移入事業を教材に用ひ勸語に公益を広めとあるは斯かる事を申すなりと説き聞かせて其保護を奨励しつゝありと云ふ事なるが之は近頃時宜を得たる思ひ付きにして□り児童のみならず県民一般に之位の心掛けはあつて貰ひ度きものなり

◎渡瀬博士出発：渡瀬博士は本日の馬山丸便にて出発帰京の途に就く由

1910年(明治43) 4月25日 沖縄毎日新聞

●蛍の話(続)／於中学校 渡瀬博士講話

<省略>

1910年(明治43) 4月25日 琉球新報

◎渡瀬博士の出発：渡瀬博士は昨日馬山丸にて出発帰京せり

1910年（明治43）4月26日 沖縄毎日新聞

● 蜚の話（続）／於中学校 渡瀬博士講話

<省略>

1910年（明治43）4月27日 琉球新報

◎マンガースと渡名喜島：渡名喜島に配置す可きマンガース四頭は本日海城丸にて松方島尻郡書記携帯送致する筈はるが渡名喜島に配置するに至れる動機は先日の紙上に報道したる通り昨年博士来島の砌り同島に赴きて親しく土地の状況を視察したる結果同地の如き小離島に於てはマンガースの消息及び其繁殖状態を知る上にも便なるのみならず同地は比較的飯匙蛇の多きが上に年々の飯匙蛇咬症者を統計に作られ而かも其数が殆んど毎年相如くの有様なるを以て今後の統計に□しマンガースの飯匙蛇駆除の効果を窺ひ知るに足るものあり村長も亦今回博士に面会して懇請する所ありて旁た同地を試験地に選定する事となりたるものなりと云ふ

◎マン公の新家庭：安里農場及び首里城に放飼せられたるマンガースの消息を聞くに城内のものは二対の中一対は多分今猶ほ城内にある可きも一対は何時の間にか城を抜け出して女子部の山に住ひ居るが如し又観音堂下の平尾別荘の付近にも一対のマン公徘徊するを以て多分安里農場に方飼せるもの、同地に遠征し来れるものなる可く他の一対は高等女学校の東側の土手に住める様あり之を発見したる動機は土手の所に四ヶ所の穴ありて其付近に見馴れぬ糞の散在せるに不審を起こして監視の結果遂にマン公の穴居せるを発見したるものなるが場員の語る所に依れば件の穴は鼠の穴なれば多分マン公が鼠を征伐して其生活を奪へるものならんとの事にて天竺の国より遙々本県に輸入されたるマン公の新家庭は先づ以てこんなものなり

1910年（明治43）5月12日 沖縄毎日新聞

●マン君の保護通牒：曩に東京帝国大学理科大学教授渡瀬庄三郎氏が印度より輸入し来りたるマンガースは一見鼯に類似し農作物の害物たる鼠及び人命に危害を及ぼす飯匙蛇等を常食とするより本県にも各地方にこれを放飼し置ける訳なるが其の穴巣を造営する迄では所々方々へ流転して爲めに人目に触れ易きより人民或は之を鼠と誤り或は見馴れぬ奇獣なるより捕獲し又は撲殺する等本紙上に於いても度々警戒し置きしが此度県農業試験場にては乱りにマンガースを撲殺せざる様各郡区役所へ通牒したり

1910年（明治43）6月9日 沖縄毎日新聞

●渡名喜島のマン君近況：渡名喜島に放飼せし四疋のマンガースは好果よろしく一疋は胚胎せしもの、如し去5月8日より6月5日迄の景況を渡名喜役場及び校長より島尻郡役所に報告せしものを見るに左の如し▲5月8

日 本日午後1時校長村長役場吏員一同マングース視察の爲め約2時間放飼場を近探するも見当たらずして帰ったり▲5月23日 本日正午二正は字島尻毛(約10町余)の内「呼子」に一疋現れ一疋は「ハギタキ毛」に徘徊するを見受けたり▲5月30日 本日午前11時頃一疋は放飼場より二丁位の東坂良にて青大将二正を咬み殺し一疋は頭部を喰ひ一疋は腑を喰い後に蘇鉄の下に隠れたり一疋は午後□時頃放飼場より約一丁位の南方字大川源を徘徊するを見受けたり▲6月5日 本日午後2時頃一疋は放飼場より一丁位の大川源に現れたり此のマングースは胎めるにや腹部大に□れ居りたり(校長報告)▲5月15日 本日放飼場より西方約七丁位の□田川原に飯匙蛇の斃死して腐れ居るを草刈人が見たり之はマングースに咬み殺されたるものと思ふ▲5月18日 本日午名3時頃一疋は放飼場より約西北五丁余のハキ嶽に棲み居るを見る(棲とあるのは岩窟に居りしの意)▲5月30日 本日午前11時頃一疋は放飼場より東方約二町余の字板良にてヒーバ(無毒蛇)二正を咬殺し一疋は頭部無く一疋は□を喰いたる死屍あり其の側に蘇鉄の下にマングース一疋居るを見る▲6月5日 本日午後2時一疋は放飼□より南方約一町位の字大小原に徘徊し居るを認む(村長報告)

いくつかの記事から首里城ならびに安里で放された後のマングースの様子が伺える。5月12日の沖縄毎日新聞からは、マングースを手厚く保護しようという県当局の強い意向が伝わってくる。

渡名喜島へのマングースの配置については、岸田(1927)では4月19日と記されているが、新聞記事では27日に運んだ旨記されている。渡瀬(1911)にも4月27日と記されているので、岸田(1927)にある日にちは配置決定等の事務的な日付のことと思われる。

渡瀬の沖縄からの帰任は、4月24日に馬山丸で出発となっている。沖縄毎日新聞と琉球新報の船便広告から同日に馬山丸が出港することが確認できたので、同日に出発したことはまちがいないと思われる。

6月9日付けの沖縄毎日新聞では5月30日の渡名喜島で2頭の蛇の死体の確認例が別々(校長と村長)に報告されている。校長の報告では青大将とし、村長はヒーバとしている。沖縄ではリュウキュウアオヘビ *Cyclophiops semicarinatus* のことを方言以外に青大将と呼ぶことがあるので、校長が報告したのはリュウキュウアオヘビの可能性もある。「ヒーバ」については、へ

ビ類一般の可能性もあるが、渡名喜島のリュウキュウアオヘビとガラスヒバアの方言名に「ヒーバ」に類する音韻が含まれている（当山，1984）のでそのいずれかを指している可能性が高い。校長と村長の両方の報告を総合的に検討してみると、蛇の死体はリュウキュウアオヘビと推定される。

その他

1910年（明治43）6月1日 沖縄毎日新聞

●沖縄みやげ（三） 桃園：▲沖縄官民の歓迎 <省略>▲第2日のプログラム <省略>▲第3日のプログラム <省略>▲沖縄官民の熱誠 <省略>▲又これ一種思出の記 <省略>▲マンガースと毒蛇 沖縄地方有名の毒蛇飯匙蛇を退治するに有効なりとの信仰を以て印度より同地方に輸入されしは食肉獣類の哺乳動物マンガースなり之れ東京理科大学教授渡瀬博士が明治40年米国ボストン府の万国動物学会に臨席の際一〇員よりマンガースの毒蛇及び野鼠の被害を防ぎ且つ駆除に効力ありとの説を聞き博士帰朝の途次印度ガンヂス畔には生せるマンガース幾頭を移入されたるもの▲蛇とマンガース決戦 マンガースと飯匙蛇の決闘試験は已に数次〇〇されし由なるが第1回に成績面白からず第2回はマンガース三四頭に飯匙蛇一頭を放つや蛇は戦闘準備をして頭を提起せし勢ひ凄まじマンガース容易に応戦せず平然として徘徊する中勇敢なる1頭は條忽蛇の後方より肉薄一躍飛電の如く頭部に咬みつく此時蛇は唯だ徒らに後身を搖曳するのみにて最早攻勢に転ずるを得ず而かもマンガースは金輪際頸部を咬みて離さず衆皆な拍手喝采勝敗即ち決したるもの決戦は第1戦マンガースの大勝利に終り2度目は稍や失敗に帰したるが如かりき

1910年（明治43）6月13日 沖縄毎日新聞

沖縄みやげ（六）：▲毒蛇と自然界 琉球にはよく人を殺す毒蛇があるその名を飯匙蛇と云ふ地雷也の講談で、も聞く内地の大蛇〇〇に百年に一度も現れないのとは違って野山は素より首里の王城内にまで棲んでゐて始終毒牙を磨いてゐる一度この飯匙蛇に噛まれるが最期毒液が全身に廻って人はコロリと死んで了ふ如もその予防法も治療法もまだ十分に研究されない今の処では全く市街にゐないといふ事と足音を聞くとき直ぐ逃げる奴だ一度噛まれ〇人はよくよくの不運だといふ事だけを頼みにして斯うして旅行してゐるのだ 那覇にある農事試験場で此毒蛇の本物を見た一寸内地の蛇と同じ恰好で長さ四尺余り頭が平たく三角形になってゐてこの両側に猛烈な毒腺があるその毒液が毒牙に通じて牙の穴から人体に毒を注射するので一

見憎らしい面構への轟だこれは県人の蛇使ひが森林中でこれを見付け竹篋で頭を押へ手早く口を縛って捕獲し金網の中へ抛り込んで来たのだが今吾々のためにマングースとの血戦をお目にかけやうといふので硝子張りの室内へ放って轡を解いた此一匹に対して三匹のマングースを差向けやうといふのだマングースの事は嘗て本紙に記載した通り東京理科大学の渡瀬博士が昨年末沖縄県の依頼によって印度ガンダス河辺に野生してゐるのを持って帰り目下県下で試験中のものでマングースは印度にゐる時によくコブラ(毒蛇)や野鼠を退治したといふ猫と鼠の如き関係を持ってゐる上に少しも毒を受けないといふ性質を持ってゐる恰好は鼯のやうでよく後肢で起つ様子はカンガルーの様だ野生の間は提防などに穴を掘って棲み蛇やその卵を捜して食ふさうだから十分これが繁殖したら恐るべき飯匙蛇も少くなる筈だといふ 愈戦闘の開始となり飯匙蛇は先づ中央にトグロを巻いて見馴れぬ奴だとマンを睨むマンの方でも変な顔して見詰めてゐる中一匹のマンが睨みっこをする隙に他の一匹は後へ廻って敵口油断を突かうとし残る一匹は遠く退いて予口に着いた互に隙を窺ふこと良暫くあつて背面攻撃のマンは鋭く敵の腹を噛んだ驚いて一尺ばかりの長い首を飛鳥の如く後へ廻す隙を正面攻撃のマンは得たりと飛び込んで尻尾を突いた敵は痛手を萎まず盛に毒気を吹きつゝ、猛然として正面のマンに立ち向ひ頭を使ふこと手足の如く縦横に突き廻つたがマンの一進一退は疾風の如く到頭敵の口に食い付いたので道かの毒蛇も弱り果て四尺余の身体に大波打たせてバタバタと転々り廻り終に半死半生の体に陥つた又飯匙蛇の新手を入れて今一度戦はせたがマンの方は余程疲労して三十分間も睨み合つてゐたから其のまゝ分かつた 元より沖縄は熱帯に近い地だから魚類は黒潮の影響で印度で見るやう珍魚が沢山ある鯨をはじめ人魚といつて昨年の東京博覧会に出品された海牛その他玳瑁に盲目蛇、飯匙蛇より恐ろしい蝎(草鞋蟲の如き恰好)も少しはある植物界では四時花を見ぬ時なく果物ではバナナ、パイナップル、パ、ヤ、龍眼、絲瓜は長さ七尺もある名物の芋は素より蘇鉄も食用になる珈琲も出来る薬用、有毒、工業用等の熱帯植物も沢山あるまた庭を飾る榕樹、福樹の美事なのや花美しき梯梧さては冬も野山を飾る三十幾種の草花には内地で見られぬものが多い(羊公)

まとめ

沖縄のマングースについて、移入当時の状況を沖縄県内発行の新聞記事や岸田(1927)の資料を基に時系列的に整理してみると表1のようになる。

表1. マングース移入当時の簡易年表

月 日	人物	事 項
1909年 (明治42)		
3月21日	渡瀬	東京発*
3月30日	渡瀬	沖縄着*
20日間	渡瀬	那覇、首里、糸満、西原、宜野湾を視察
4月6日	黒岩	那覇へ 池畑旅館
4月8日	渡瀬	沖縄教育講話会 那覇尋常高等小学校
4月9日	渡瀬	尚家訪問 岸本学務課長、黒岩
4月12日	渡瀬	渡名喜島を視察 (県属大山武輔島尻郡書記松方太次郎の案内)
4月28日	渡瀬	沖縄から東京へ出発
12月22日	渡瀬	横浜解纜丹後丸にてインドへ*
12月24日	渡瀬	東京発インドへ*
カルカッタから那覇へ51日間		
1910年 (明治43)		
2月21日	渡瀬	インドカルカッタを出発* <逆算により算出>
4月4日	大工廻	渡瀬と合流*
4月13日	渡瀬	平壤丸にて来県 浅田旅館に投宿 (マンガース29頭、大工廻技師同行)
県庁訪問の後、農事試験場を訪ね橋本農商課長、中目、倉賀野、技師佐伯、大工廻技手と打合せ、安里の試験場第二農場を視察		
4月14日	渡瀬	午後2時講演 (沖縄教育会主催) 那覇尋常高等小学校午後 午後6時風月樓にて歓迎会 午後6時
4月15日	渡瀬	午前10時南陽館前農事試験場にてマンガースの試験を行う 午後0時県庁会議室に実験場を移す
4月18日	渡瀬	首里城内をマンガース放飼のため視察 (倉賀野技師同行) 安里農事試験場の甘蔗畑にマンガース2対放飼 (倉賀野技師立会)
4月18日	黒岩	運輸丸にてマンガース4頭を携へ帰校
4月19日	渡瀬	午前9時首里城へ (倉賀野技師大工廻技手同行) 午前11時雌雄4頭 (2対) 神廟殿後方の藪中に放す 午後4時物産陳列所を訪問
4月19日	—	農商務省沖縄糖業改良事務局 (西原) 4頭 (飼養) **
4月19日	—	渡名喜島4頭 (放養) **
4月19日	—	農業試験場 (久茂地) 5頭 (飼養) **
4月20日	渡瀬	首里城及び安里農場のマンガースを視察して午後3時帰那
—	—	首里織工場付近にマンガースが現れる
4月21日	—	首里織工場付近にマンガースが現れる
4月22日	渡瀬	午後2時県立中学校にて講演
4月24日	渡瀬	馬山丸便にて出発 帰京
4月27日	—	渡名喜島へマンガースを放す

* 前後関係等から日付等を推測した。

** 配置計画を示したものと思われ、実際は渡名喜島のように実行が若干ずれたものもあったと思われる。

移入当時のことについては、まだ不明な部分も多く（例えばハブとの実験が終わった後の1910年4月16日と17日の内容）、今後の資料の集積も必要と思われる。また、新聞の他に、当時の模様を記した文献（渡瀬庄三郎（1910）マンガースに就いて。沖縄教育（49）:4-7； 泰蔵吉（1910）マンガース輸入と渡瀬博士。沖縄教育（49）:20-23）があるらしいが、この文献は現在のところ存在が確認されておらず（那覇市企画部市史編集室編，1977）、今回それを入手することができなかった。一部ではあるが、岸田（1931）にはその内容が記されており、ある程度はうかがい知ることができよう。

本報では、移入時の地元発行の新聞記事を中心にまとめた。しかし、マンガースに関する新聞記事の情報はその後も続いており、各地に配置されたマンガースがどうなったかも含め、継続して資料の集積をしなければならないと考えられる。また、文献も含め、古い記録等も併せて調べることも必要と思われるので、今後ともこのような観点から調査を進めていきたい。

文 献

- 藤枝則夫（1980）沖縄におけるマンガース *Herpestes edwardsii* E. Geoffroy の分散と現状についての一考察。琉球大学理工学部生物学科課題研究論集。
- 伊波興清（1966）マンガースの分布と食性について。沖縄農業，5 2(10): 39-44。
- 池原貞雄（1991）沖縄島における外来哺乳類・鳥類の分布状況。池原貞雄（編著），南西諸島の野生生物に及ぼす移入動物の影響調査。pp.31-41。世界自然保護基金日本委員会、東京。
- 池原貞雄・与那城義春・宮城邦治・当山昌直（1984）琉球列島動物図鑑1 陸の脊椎動物。新星図書出版，350p. 那覇市。
- 川島由次・稲永充孝（1996）大宜味村におけるハイイロマンガース (*Herpestes edwardsii*) の捕食動物種の分析。沖縄県獣医師会年報，(19): 31-33。
- 岸田久吉（1927）マンガースの食性調査成績。農林省鳥獣調査報告（4）: 77-120。
- 岸田久吉（1931）渡瀬先生とマンガース輸入。動物学雑誌，43(508/509): 70-78。

- 那覇市企画部市史編集室編 (1977) 沖縄教育目次集 (第31号～第309号). 那覇市史だより第8・9・10合併特別号, 44p. 那覇市.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所編 (1995a) 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 浦添市. 139+35+3p.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所編 (1995b) 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 浦添市. 124+44+3p.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所編 (1997) 平成7年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 浦添市. 172+43+3p.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所編 (1998) 平成8年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 浦添市. 186+36+2p.
- Pocock, R. I. (1937) The mongooses of British India, including Ceylon and Burma. J. Bomb. Nat. Hist. Soc., 39: 211-245.
- Tomihara, Y., K. Yonaha, M. Nozaki, M. Yamakawa, T. Kamura and S. Toyama (1987) Purification of three antihemorrhagic factors from serum of a mongoose (*Herpestes edwardsii*). Toxicon, 25: 685-689.
- 当山昌直 (1983) 動物. 渡名喜村史, p.35-41. 渡名喜村.
- 渡瀬庄三郎 (1911) 渡名喜島の「マンゲース」繁殖す. 動物学雑誌, 23(269): 109-110.

(とうやま まさなお: 史料編集室、おぐら ごう: 琉球大学農学部)